生徒会が「置き勉宣言」

石岡・園部中

一人の選挙公約が始まり

石岡市立園部中では、生徒会メンバーが学校に働きかけ、クラスごとの話し合いなどをへて、自宅で使わない教材を学校において帰る「置き勉」を認めました。以前は「主要5教科の教科書は、毎日持ち帰る」というルールがありましたが、「通学かばんが重い」「肩が痛い」などの声が生徒から上がったためです。

置き勉を働きかけたのは、昨年の生徒会書記、2年、金久保さくらさん。友達の声を聞いて、生徒会役員選挙で公約に掲げたことがきっかけです。実現しようと、当選後に「体も心も軽くプロジェクト」を始めました。

先生たちには「家で勉強をしなくなってしまうのでは」「（教室の）整理整頓はできるのか」などと心配されました。生徒の思いを理解してもらおうと、学習端末を使ってアンケートを取ったり、新聞などで置き勉を始めた他県の例を調べたりして、なぜ認めてほしいのかを訴えました。さらに、全クラスで話し合いを重ねました。

それらを土台に、生徒会長名で行ったのが「置き勉宣言」です。学校は清潔に保つこと、自宅で勉強に必要な時間を持つことなどを誓いました。テスト2週間前から、3教科以上を自分で選んで持ち帰ると具体的な方法を示し、昨年12月から置き勉をスタートしています。

前生徒会長の3年、真家煌生さんは「どの教科を家で勉強するのか決めて持ち帰る。自分で決められるから自律につながる」と話します。金久保さんは「たくさんの人に理解してもらうために、アンケートの文言を何度も書き直すなど大変だったけど、友達から『ありがとう』と言ってもらえてやってよかった」と締めくくりました。

取材に対応（たいおう）してくれた生徒会メンバー＝石岡市立園部中

異なる意見、共通点探そう

カタリバ　古野さん

チームでオンライン取材する高木一佳さん（右上）。右下が古野香織さん

茨城こども新聞のこども記者、高木一佳さんが参加するこども新聞サミット「理想の学校」チームは、認定NPO法人「カタリバ」（東京都）の古野香織さんらをオンラインで取材しました。全国の中学校や高校で、校則・ルールの対話的な見直しを支援する古野さんは「子どもや保護者、先生、いろいろな立場の人が対話をするのが大切。違う意見がたくさん出てくることが良い形」と強調します。

「ルールメイキング」を支援する古野さんが一番大切なこととして挙げるのが、異なる意見を持つ人同士の対話です。違う意見があるとき、「AとBの意見で『どっちがいい』を考えるのではなく、AとBの共通している部分を見つけて、新しいCという意見をつくる。お互いの意見の共通点を探す」とポイントを解説してくれました。

近年、ニュースなどでは「ブラック校則」という言葉が話題になります。「人として持っている権利を邪魔してしまう校則はすぐに変えた方がいいが、校則をなくす、つくるのは手段の一つ」と古野さん。「もっと大事なことは何のためにその校則があるのか、目的を考えること」と話します。

意見活発に言える学校に

私が取材で感じたことは、カタリバも二つの中学校も、みんなが納得するまで話し合いをしていたということです。私は、みんなが納得するまで時間をかけて話し合いをした経験がなく、多数決によって早く決めるのが効率的だと思っていました。しかし、今回の取材を通して、納得するまで話し合うことの大切さに気付きました。

学校のルールは、みんなが守れて負担にならないというのが理想です。また、決まっているルールでも、生徒が変えたいと思ったら変えられるというのがよいと思います。

私が考える理想の学校は、みんなが意見を活発に言える学校です。そのためには積極的に意見を言えて、自分の意見が認められる環境をつくることが必要だと思います。

体験学習をしたり、自分の好きなことや好きな勉強ができたりするのも、理想の学校だと思います。先生に「これをやりましょう」と言われても、得意不得意は人それぞれです。その人にできる得意なことを伸ばすために、好きな勉強を選んだり、いろいろなことを体験したりする時間をつくってもいいと思います。

（高木一佳）